平成 30 年 4 月 14 日

平成 29 年度　総合文化研究所研究助成報告書

研究の種類 ※該当する（ ）に○を付ける	・共同研究（○）　　・個人研究（　）	
研究代表者 （所属・職・氏名）	看護学部　准教授　大山真貴子	
研究課題名	糖尿病患者のセルフマネジメントサポートシステム開発 副題　糖尿病患者のセルフケアを促進および阻害する要因の検討	
研究分担者氏名	所属・職	役割分担
伊藤　まゆみ 岩永　誠 貝瀬　友子	看護学部　教授 広島大学　総合科学研究科　教授 関東学院大学看護学部　教授	研究計画 研究計画・実施・データ解析・執筆 研究計画
研究期間	平成 29 年 4 月 1 日　～　平成 30 年 3 月 31 日	

研究実績の概要（1）

研究発表(印刷中も含む)雑誌および図書

研究発表は，H30 年 12 月開催予定，第 38 回日本看護科学学会にて行う予定である.

雑誌は，共立女子大学看護学部紀要に投稿予定である.

[研究概要]

本研究は，2 型糖尿病患者のセルフケアに影響する要因を調査し明らかにすることが目的である。2 型糖尿病患者は疾病の重症化と合併症予防のため療養行動をセルフマネジメントに関しながら生活を送っている。そして、治療継続やその意欲維持において糖尿病患者への教育的介入は短期的に患者自身の行動変容を促し良好な結果を得ていることが報告されている。

研究代表者が実施した調査結果から、糖尿病患者がセルフケアを獲得していく時，医療者からの糖尿病教育によってセルフケアのスキルを身につけるとともに，患者は医療者あるいは患者家族や周囲の人々からの尊厳と共感を得ることで望ましい療養支援を受け、患者は良好な血糖コントロールを保っていた。

しかし，セルフケアが確立できない状況にある患者も多く，そこにはセルフケアへの教育的な介入では解決できない心理社会的な要因の存在が報告されている。そこで，本研究では糖尿病患者のセルフケアに影響を及ぼす阻害要因に着目し検討していくことで看護への示唆を得ることとする。

今年度は以下の 2 研究を行った.

研究 1：糖尿病患者のセルフケアの困難感に対する思いと工夫に関する質的検討

[目的]

本研究は，糖尿病患者のセルフケアマネジメントサポートシステムの開発を行うための基礎的資料として，糖尿病患者のセルフケアにおける困難や工夫に対する捉え方を質的に検討することを目的とした。

［研究方法］

調査は，糖尿病専門医に受診する 2 型糖尿病と診断を受けている方々に，平成 29 年 5 月～6 月まで実施した。調査内容は，①対象の属性（性別，年齢は年代のみ，糖尿病罹患暦，治療方法など），②糖尿病の療養行動（食事，薬物に関する日々の取り組み），③糖尿病セルフケアの困難やその対処，④そのセルフケアに対する家族の支援状況である。

調査の手続きは，①調査対象者が所属する病院を通して調査を依頼する，②調査対象には書面と口頭で調査の目的，内容，方法，倫理的配慮，データの公表などについて説明し，調査への同意を得る。④調査は，プライバシーの保護できる個室で半構造化面接を行い，データを収集する。⑤面接内容は，調査対象者の許可を得て IC レコーダーに録音し，逐語記録としてテキスト化する。⑥面接時間は 40 分程度とする，である。

[結果]

調査数は 7 名（男性 4 名，女性 3 名），平均年齢は 65.5 歳，患者の罹患歴は 10.5 年，平均面接時間は 39.5 分であった。得られたデータは心理学専門家 3 名とともには KJ 法にて分類した。先行研究から阻害要因と促進要因を明らかにし，これに基づきインタビューガイドを作成した。研究対象者に半構成化面接を行い，KJ 法にて分析中である。

研究２：糖尿病患者のセルフケアを阻害する要因の検討

[目的]

本研究は，糖尿病患者のセルフケアの困難感に対する思いと工夫の検討結果と文研検討によって，糖尿病患者のセルフケアを阻害する要因を明らかにすることを目的とした。

[研究方法]

研究に先立ち，糖尿病患者のセルフケアを阻害する個人特性に関して文献検討し測定概念と質問項目を検討し，各下位尺度の項目の決定は，心理学系大学院教員 2 名，看護系教員 4 名で協議し，確認した。

調査は，平成 30 年 2 月に全国の糖尿病患者を対象のインターネット調査を実施した。尚，研究倫理審査は研究分担者の所属する機関で承認を得た後，実施した。

[結果]

調査対象者数は 1000 名で，有効回答は 976 名であった。現在はデータ分析中であり，項目分析，要因の関連を検討している。今後は得られた結果から，さらに分析を追加していく予定である。